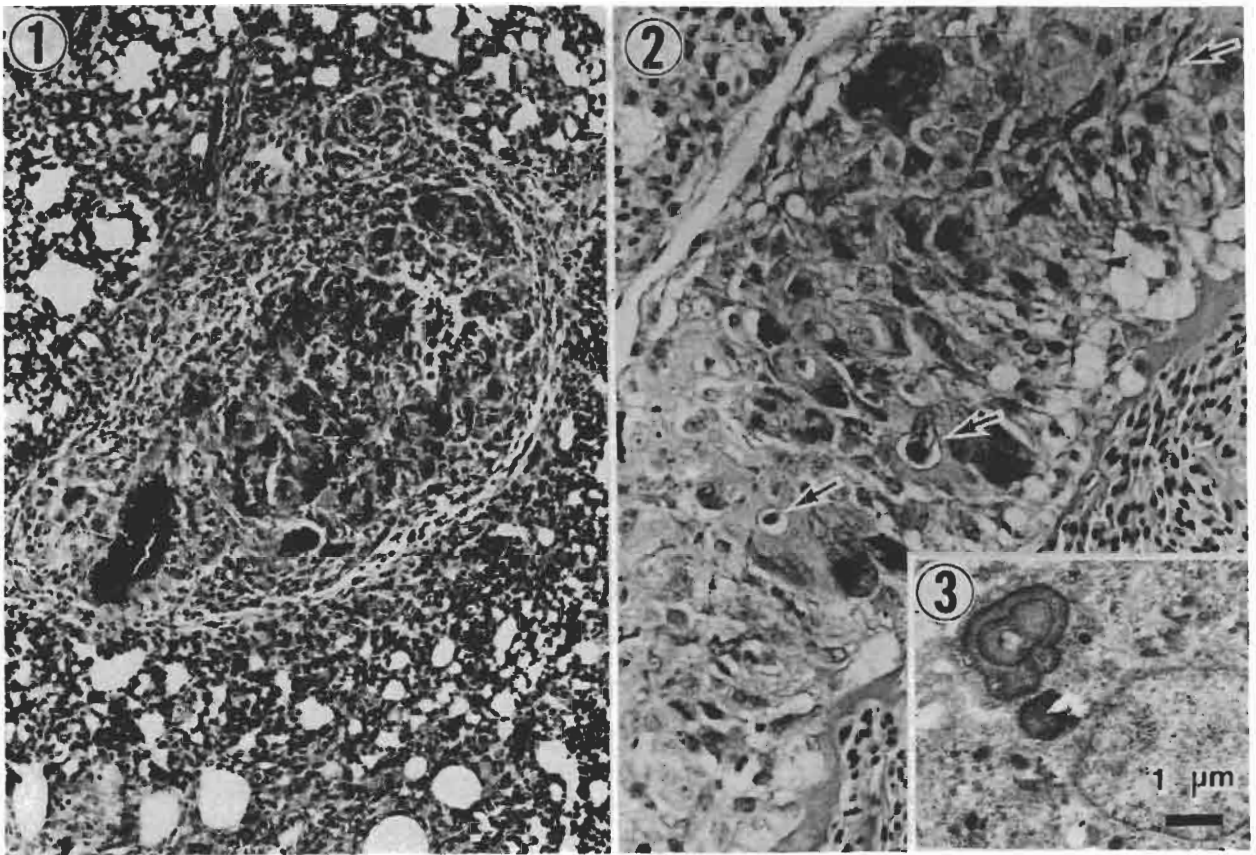


# 鶏の肺

農水省家衛試毒性病理研究室・兵庫県和田山家保出題 第29回獣医病理学研修会標本No.513



**動物：**鶏，ブロイラー，15日齢，雄。

**臨床事項：**ブロイラー鶏36,000羽を飼養する農家で，1鶏舎9,000羽の群において，15日齢頃に沈鬱，発育不良を示す病鶏が発生し，29羽が死亡及び淘汰された。提出例はその淘汰した中の1例である。

**剖検所見：**胸腺萎縮，大腿骨骨髓の黄色化が観察されたが，肺には特に著変を認めなかった。

**病原検索：**肺から鶏貧血因子(CAA)が分離された。

**組織所見：**肺において，血管壁，第二次・第三次気管支周囲に肉芽腫が認められた(写真1，H E染色，×160)。肉芽腫は壊死を伴わず，巨細胞を含む類上皮細胞からなり，巨細胞内に好塩基性の異物がしばしば認められた。異物の染色態度はH E染色で大部分が好塩基性であり，PAS陽性(写真2矢印，PAS染色，×400)，コッサ陰性，鉄陰性であった。形態は二重輪郭，線状あるいは顆粒状を呈していた。電顕的には，主として巨細胞の細胞質内に電子密度の高い，等高線状を示す異物が認められた。異物の大きさは1μmから22μmで不定形であった(写真3)。肺以外において，骨髓は造血系細胞が消失し，脂肪細胞が代償性に増え，胸腺は，皮質，髓質ともにリンパ球が消失していた。脾は中心動脈周囲のリン

パ球が著明に減少し，リンパ球の変性，壊死も見られ，白脾髄の構造が不明瞭であった。心では心外膜炎と心筋層内の肉芽腫が，甲状腺及び上皮小体では周囲組織の肉芽組織の増生がみられ，腺胃の腺組織にも肉芽腫がみられた。

**考察：**肺にみられた異物は，その形態，大きさ及び主として巨細胞内にみられたことなどの特徴から，ヒトのサルコイド肉芽腫にしばしば認められるシャウマン小体に非常に類似していた。病変の成立ちとしては本体不明のものが血行性あるいはリンパ行性に運ばれ，動脈壁等に侵襲するとともに，そのものが異物として処理される過程にある状態と考えたが，異物が気道を介したのではないかとの意見もあった。

疾病の全体像としては，肝から鶏貧血因子が分離され，病理組織学的に再生不良性貧血像が観察されたことから鶏貧血因子感染症と診断された。本例の肺病変はCAA感染とは直接的には関係はないと思われるが，再生不良性貧血像，胸腺，脾におけるT細胞の著明な減少等による免疫異常が関係している可能性もあると考えられる。

**病理組織学的診断：**鶏の肺におけるシャウマン小体様物を含む異物巨細胞肉芽腫。